10
9

へ13
3843
9

門へ13
號3843
巻9

繪本西遊記初編巻之十

孫行者三島求方　觀世音甘泉活樹

孫行者い觔斗雲に打乘り東洋大海中蓬萊山に至り福禄壽の三星に逢く樹を活を方をヨるまでも禽獸たゝひへ丸しの霊藥にく活をべきれども人參樹を活べき方なしと答へ見に依く行者身をかゝして方丈に往て東華帝君に見へみ瀛州に至りて九老をたづゝ木を活をの方を問へどもいづくも仙樹を医をべき茶迄行者遂に南海に花行き觀世音に見へく事の子細を物語るに菩薩ものしめ給へて宜く是甚安き事なり吾此淨瓶に入れ

観音大士活人参樹
沙悟淨
悟空
八戒

観音

ちご驗あり向に太上老君我と賭して揚ると時に楊柳を棄ひ
丹爐の中へおし入く焦したり吾其柳をとりて瓶中にさし入れ甘
露水にひたしるに忽生活して今に青くたり是をとりておりゝ
に人參樹を活さんと何のかゝれ事ならん行者大きによろこび直
觀音の所供して五莊觀に立除る大仙を迎め三藏八戒悟
淨等菩薩の来りまつるとゝ一齊に出迎謹てれをなした行
者大仙に向ひてやるい吾南海に往く菩薩をたのゝまつせ
かの人參樹を活さんとはたやく用意をはまつと云大仙則仙徒
仙童に命し後園をきよめ菩薩をとゝ人參園にいれま
みゝ世衆人皆く後に引そひゝ立ゝ菩薩近く行者をま
ねき渠がまの心よ起死回生の符と畫き瓶中の甘露をはて

是をひゝ樹の根に拳をとゝ入忽一道の清水湧出さ
せ菩薩仙童に命じて其あを玉碗に多ゝ出し行者
八戒悟淨等に作てゝの大木を引起させ玉器のあを揚柳の
枝にひゝ樹にむすひく淀ぎまつが暫時の内に旧のごくに生
成り二十三個の人參果枝にたらなり前よりも尚おそやうゝ
此時童子やるい前日行者が人參果を偷とあとに二十二個
みのりたるが今日却く二十三個成れゝ行者是をゆて大きに
笑ひ原来吾只三個を偷ゝ一個は誤て地におとし你く地中に
流こゝ入ゝ八戒是をとゝく吾が多く吃ゝと怒ひしが今日は
そて明白ゝ大仙其時よろこびまつと大ゝきまつ遂に十個の
人參果をとりて菩薩をはじめ三藏師弟をそはに已ふして

妖魔妻女
進装織食

菩薩も南海に回り玉へば大仙ハ孫行者と兄弟の約をなし所に五六日滞留し三藏師弟遂に大仙に別れを告げ西にむかひ玉出る人

尸魔三戯唐長老　聖僧恨逐美猴王

玄壯大三藏ハ五莊觀にて人参果を吃ひてより忽仙骨生じ神変にして高山に登る事手地とあるむかしに時に三藏行者に向ひて曰く我今飢に苦まる進ずがと作いづくにも往てもし の齊飯をもとめ来る行者是を領ず雲に乗りて南の方へ去りにより家に一個の妖怪あり身変して客儀妖艶の美女と化しまに緑磁の器をとり前面より向ひてやるハ此山ハ白虎山領と申し此禁に我家あり近き所父母をもとめ亡者の為に一鉢の齊飯を供養せんとて長老をとらへ給へんや三藏よろこんでかの器をとりて既に吃ひんとし玉ふ所に空中より大音に呼ハつて曰く師父其食吃ひ給事なかれ三藏驚て足をとゞめれば孫行者一条に下り来り金箍棒を打振りてかの美女を只一打に打殺したり原来此妖怪解尸の法を使ひ本身ハ空中に在て女屍をとりて家に居置孫行者にうたせたりし時三藏大きに怒り汝故なくかゝる善人を打殺しハ何事ぞや行者曰く師父あやまりを知れ此女子原来妖怪なり女の屍を以て身を解吾徒捧をのがれなれども器の中の齊飯をとりて其妖怪をとりもどす三藏

三蔵
悟空
沙悟浄
八戒

悟空
笞殺
女與
爺婆

再び驚き怒器をとりくんでこれに癩蝦蟆長尾蛆の類蠱毒
の類八戒行者をうらむ〳〵きの女を打殺したるとて心に怨を恨
進み出て三藏に告て曰く行者を未人と殺と事成好いこの
女ハ是怪にあらず正〳〵農家の女なり器の中に蟲蝨と入るも
今く行者の法術を師父の目をくらまんのなり三藏両徒弟
う言を聞て心に決せること能ハ躊躇してことば臣この時
空中にいろ〳〵の妖怪再び身を変じて八十余りの老婆となり
三藏の前にあゆみ来る行者目を定て此老婆を見るに足もとと
人にいらぶして妖怪なり行者怒て你妖精再び来る吾師父
を戯るゝやとこれ絶らず鐵棒を挙て忽老婆を打殺せり妖怪
まと解尸の法をたゝい身を脱して老女の屍を取て倒し置

三藏おどろきまゝ人をいろんなく行者を責く宣ひるハ你ぢ
何ぞ人を殺せるかくのごく甚しきや八戒ハ進んで曰く此老
婆ハ果して先の女の母なるべし行者罪なき人を殺してたのし
むハ原来行者の生質なり行者是を聞て怒て曰く你獣子猥
ア言を發せること勿れ向の女ハ年紀ようやく十七八今の老婆ハ
八十有余何ぞ六十に余りてこれを生んやなに妖怪ハ一個の老
翁と化し崖の下路をとゝ〳〵とあゆみ来る行者又是をみるに同
くこの前の妖精なり大きに怒て口中に咒語を念へ土地の山神と
呼出しやうる此妖怪已に三度まで来りて吾師父をたぶらかせ
等空中に在て妖精を去らしむることなれ眼神領〳〵空中に
いりて妖精を固く住む孫行者今ハ心安しとて鐵棒を振入て

悟空

悟空
還洞
討殺
獵人

かの老翁を一打に打殺せば一陣の靈光と化して四方に散じて
亡失らう行者狭捧突て三藏に向て曰く師父今こそ妖
精と實に打殺せりちうとて見まくと云三藏いよ〳〵おどろき
馬とよせて見まくに一推の骷髏地に倒るを三藏行者に
問て曰是いかなる何者ぞや行者の曰く渠原来倒れ死し
たるものゝ靈魂所よりまうて妖をなす也吾に打まゝ本相
をあらはしたり八戒をもひてかるい師父行者のかたを信じ
な渠三たび人を打殺しぬると師父の緊箍兒を唱へて責め
るかたを恐れ法術をほどこす骨を師父の眼を
掩へるのなり三藏は八戒の信じ行者がふるまひを恨み
叱て曰く你今に至て究性を改めず豈我徒弟とするに西天に

至り得んやとて故郷に去るべし行者の曰く吾妖精を殺
すに師父の害と除きまゝるに一個の獣子がやうを信じ我を
逐ひ給へ何事ぞや抑我両界山を救ひ出されてより以来古
洞を穿ち林に入り千辛萬苦して妖魔を除きしも年竟
鳥盡て弓藏を兎死て狗烹るとは世の諺もおそれ給へ
とて三藏行者の言葉を益腹怒を發しまづ〳〵貶書と
写して行者にあたへ你南に云てと止よ我再び你を以て徒弟
とせば西に向て一歩も出るべからず行者今はせんすべなく悟淨に向
て申る是より然向り妖精あるて師父と投んとせば你声を發し
て孫悟空とよる大徒弟あり師父とあやまるべ勿ぞまた你等を罪
をまぬかれんと呼ばゝ千禽萬獣我名をゆびかるべ駭きこと

三藏

三藏看レ塔
陷二妖魔窟一

べ〜と云終く觔斗雲に打のり花果山へ立ちかへる

華果山群猴聚義　黒松林唐僧逢魔

孫行者氏時東洋大海をとる〜く遂に花果山にかへり山中をとぶく荒たる〜峯崖を崖崩をむり〜見〜山も笑えに暫くあきれてなぐさむ処の坡の陰より七八個の小猿走り出大聖向うをつらつて我生れをる以行者問く曰く我暫く向うさる内に何とてかく山中の荒たるぞ小猴仰て答へ中るハ近来大勢の猟人氏山に〜我〜養族を猟取り或ハ煎〜足を炙ひ或跳圈せてなく〜さとは敢一個の猿も頭をさ〜出すの故大聖憐みを垂をて笑ををくひ曰く行者汝て大きに怒り你ら毋くおりへ匿吾氏猟人

を麼金うて你ら仇をむく〜匿とて山の上より多くの砕石を積置猟人の来るを待ゐり時に南の方より数千人の猟師鷹を居へ犬をさらせ羅鼓を鳴し〜花果山に臨んで押よせり悟空是をとく〜山の嶺に立あらられ兄を唱へ〜異の方に向ひ一気氣を吐下をに忽ち狂風吹起り那積貯の〜砕石雨わとれとび来て猟人を討ゐ或ハ頭を討き或を損ず先腸の者殺を初ゆ〜ゐりぐに成りて逃失うり悟空たもあらんと大きに笑ひ水簾洞の前に一個の大旗をとる〜十四個の大字を写に其書曰く

重修花果山復整水簾洞齊天大聖

さるほどに玄奘三蔵ハ遂に心猿と牧ち意馬に敲ら西の方白

八戒
需食
勞眠
叢中

虎嶺をゆきすぎるに一個の松の林に入り〻て三藏まづ腹中飢に及び八戒をして齊飯をとゝのへむ八戒釘鈀を提西向して十余里を馳るにいまだ一軒の家も見ず草亡くして生産なき人倫絶たる荒野なれば身體労ものの草窠に這入て万事放下おりゐ仮睡するるにて三藏い松林の中に在て八戒を待ゐるかつゝ沙僧に向ひて議しまゐ八戒原是獃子何ものの如く行るゝと知るべからず你ぢ和尚を引ぬれば沙僧命をうけ寶杖をたづさへ同じく西に向く去り去りぬ三藏一人松林に座して待詫るに忽ち南の方にあらわれ一座の寶塔あり三藏心よおりひるがへ我東土出るに西に至るに遠に寺院廟塔あらず佛を拜し地を拂ふと誓とまるせり西往来の路の間に此塔をあまたして行李と馬と其如く

繫ぎ並かの塔門の入り見れい石床の上に臉青く猫のごとき才生なる妖魔よく熟睡なれば三藏大きに驚き身を轉して逃出るを那妖魔目を開き失庭に来て引こゝへ你何國の人なる僧なるやと尋るに三藏大きに恐れ謹でやて曰く貧僧い東土唐國の者天子の勅を蒙り西天に至り經をとゝもるものなり此寶塔をとるかに及ばせんとて来たり妖魔の曰你同行の者いくや三藏の曰く徒弟二人馬と行李い都く松林の内にあり妖魔大きによろこび小妖をめして三藏を柱に縛付させ渠が徒弟二人馬と共に我食物にあて来るを門を開てかの徒弟ら実に来るを待一連に吃ひ喪さんとてきびしく門を扇再び石上に睡てゐる此時沙悟淨い十里斗りも進こ

妖魔猪沙
挑戦雲中

波月洞
八戒
沙悟淨

行に八戒が在所をえびいづくへゝ行らると岡に上りのぞきゝれば
叢の中に嘷の音を沙悟淨あやしき草を用きて是をゝれ
いかの八戒が中に打臥く死るく寐入りゝ沙悟淨心怒り耳聯
を掴く引起し沙獸子師父の飢ゑをもかつゝえに寄に在て
眠ることゝるやとゝ引ゝく旧の松林へゝり入れば馬と行李ハ在て師
父ハ見ゝ沒沙悟淨大きに驚き師父ハいとや妖魔の為に食れ
まゝり皆是你が獸子より来ぬ裝束ゝやく行場をたづね迯とて
馬を牽て林を出南の方をゝるに一個の寶塔かゝに在八戒と
らゝて你ゝぐりに人を罵ることなゝれ師父ハ必を此塔下に至り佛
像を拜しまゝかならんとて二人ゝりて塔門に至りゝれハ門の扉
緊く閉ぢ門上に碗子山波月洞とゝ六字を彫り兩人の徒労

らゝかゝ門を叩き吾師父をかへせくと叫びるにの妖魔大力
を提げ門をひらきて跳て出八戒沙悟淨兩人と追つかへつ戦く
彷彿の色いまゞ見えゝ

脫難に流来國士　兼恩八戒轉山林

此時三藏ハ洞中に縛られ洞房ゝること兩のゞゝはに一人の美女洞の
奥ゝり出きゝり三藏とゝく供り涙をはら向て曰く長老ハ是何
人ぞや三藏答て曰吾大唐より西天に至り經を需る者なり
你事を尋るに及ばゞ殺さんと欲ばやく殺をゞくかの美女の曰く
我ハ人を吃ゝ妖魔にあらゞ舊我家ハ家を去事三百余里宝藏
國とゝ國王ハ則我爺ゝなり我不幸にして十三年前に妖魔の

百花差

魔縛三藏
女解附書
三藏

なりにさくられまゝ婦の云ひとは一女一男を生てたゞき命をな
かゝ伝る吾今一個の計を設けて長老の命をとゞひまつりとゞき
同我寶藏國へ書を持行吾が所より在る事を父母に告げてゆう
いるとていそゞげゝ書をりきらめ三藏に附屬へ繩を解く三
藏を西已られハ三藏爰のゝ心地して你く法令の恩を謝しかの
書ハかならず你のハの節にてんせまつらせ你はくらなきを張べし
あいうよりそ此如をのがれ出いんと向るべかの天女三藏を引く後
門に至り都く我に却すうせ志ばらく爰に志のひておうせとて
爰を同して前門に立出黄袍郎志ばらく我ひを止く爰に来り
ゆくこゝ望られハ此時妖魔八戒悟淨と雲中に在く我ひるゞ渾
家の声を聞て両人を却ひの中く爰来り你何の急事有

てゝ我我ひを止めるぞや妻の曰く吾今不思議の夢を見
たり甚爰に依く郎君に説話あり我昔如雅時より仏に一つの
願を立賢明なまを得く一生を任せるべ僧に対して一善事を
修んと誓うされば郎君のゞきの丈夫を得く常に楽
りり吾今に至て僧に弦を誓とれおらう無るよ只今爰の
内に一個の金甲神將来りるひ誓ひに背く罪を責るひ既に
劔をとりく斬ると見く爰ハそうり志るにちらゞる一人の和
尚傳りを立くかゝたり是將に妻り誓を満をゞき期至れ
ば郎君妻を愛する事眞まゝの偏のいはゞめを解免し
帰らるゝ立ゞく吾ゞ月仏せると甚くからんの妖魔笑ふ曰
我何の時り你ゞをそたにたゞいる事やある善となく悪とな

三藏
沙悟淨

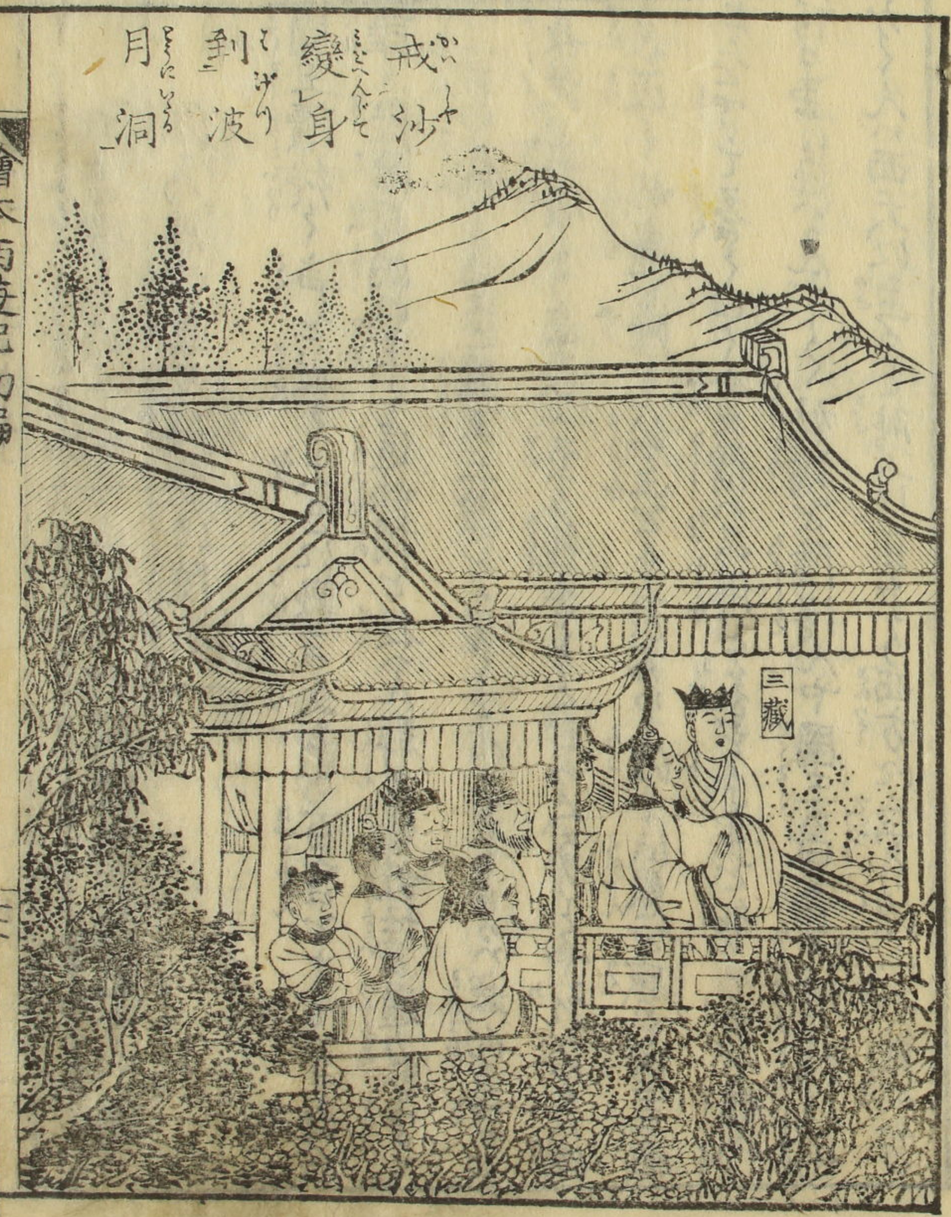
師與兩
京趣實
象國
八戒

你が死ぐるほどのことをぐく我これを聽んと唐僧とのるさんと思で
你が父のまうしべし女大きにとろこび後門に走り行き三藏
に向ひて曰く長老你が命は既に救ひはるう我名は寶象國
王第三の公主百花羞とゝもとる今の書かきらぐ偽つくるかれと
て終よ後門を開きて三藏を出すに前門より妖魔大声を
上く呼ばりるい你兩人の僧我あく恐るにあらずといへども
渾家の命をひにより唐僧と俱に臣ゆらしもろ後門
に至く師父をたづねとゝたり八戒悟淨
是を聞て大きにろこび馬を牽て門の後に至りれば果て
荊棘の中より三藏一人走り出師徒三人互に悲きを收び
忙き師父と馬よかきの也道といそぎて馳ろる行ること三日を

ろて寶象國の王城に至りかの公主百花羞が書をさゝげて朝
廷に至りれば國王三藏師徒と金階の下ゆきまべ收び開
きて其書に曰く

不孝女百花羞頓首拜禀父王萬歲殿前暨三宮母后
宮下。拙女幸托坤宮感激劬勞不能盡孝乃於十三年
前中秋夜賞玩月花不期一陣狂風閃出個金睛藍面
魔王將女擒住駕雲提至深山被妖強占為妾勉捱十
三年產下兩児盡是妖種論比則壞人倫不當傳書玷
辱但恐女死之後不見分明適遇唐僧亦被妖怪擒住
是女設計放脫特托寄此片楮以表寸心伏望父王垂

八戒
汝悟淨


戒沙
變身
到波
月洞
三藏

悟淨遣上將至碗子山波月洞捉獲黄袍怪救女回朝

深為恩幸草々謝恭法陳不一

國王讀終く声を放く大きに歎きて武の百官をすゝめきあつめ
誰か能波月洞に至く這妖精を捉へん群臣皆妖怪げ通力を守て
一言の答るものなし國王三藏をちらくゝやきてやるハ我向よりなく
長老ハ大唐より西天に至る經をとゝむる人なりとも我がなくハ法
力をなく妖魔を降し公主をとゝびあく深く山恩を感ぜ臣三藏
を留て答く曰く貧僧ハ只佛を信ずる事を知て勇て法術
なる事ハいんぞよく妖精を降伏んや國王の曰長老魔降伏術
なくんば西天に至ること能ハ臣是より西方に至く深山幽谷波月洞

にあるく悉妖魔の住没まりいそゞして佛を拜ゝらん三藏の曰く
我二人の徒弟あり頗法術あり我を守護ゝ衆度も危ふ
難を免れり國王大きに喜ぶ八戒悟淨をちかくめゝ
是を見るに尋常の人間にあらず國王先問く曰く二位の長老
よく妖魔を降伏法術ありや八戒声を應じて答く曰く我よく魔
を降伏術をなすり家におゝく國王試に其変化をなん事ハ
ちらハ八戒ハ口中に咒文をとなへ一度身を動せば其身の長
八九丈左右の群臣驚くこと大方ならず悟淨もまた身を振ひ
ゝく背高きこと変じ両人互に相謂て曰くいざ見よう波月洞
にいるかの妖精を拿へ来らんと云ふとおりゝ忽まち一聲の雲
を起ゝ八戒ハ釘鈀を提げ悟淨ハ寶杖を携へ雲にのりこゝ

空中を一飛に波月洞へと駆行る

繪本西遊記初編巻之十終

天の真柱　全一冊
外國より伝へたる天地の說 皇國の古傳說ニ考へ合せたる書なり神代考と共にてとにかくも古学の基なる他に出るものなし

古語拾遺句解　全二冊

大祓後之釋　松の屋藤井大人著　全二冊

さやし草紙　木下幸文大人著　全三冊
此書ハ歌学びの方によれる說等ふして万葉集より古に集ども多く物語書の上なるものゝ編ひ後もあらゆる歌の奇說ども多く且書文の奇ども... 採び挙られる何ハ大人の多く文ども...

枕草紙傍註　全十冊

増補和歌明題部類　小本　全二冊

同　續　小本　全一冊

増補和歌組題集　名所部類考　合刻小本　全二冊

日本紀竟宴歌集　全二冊

俳諧近世發句類題集　全四冊
此書ハ當時の諸名家諸發句諸分かちあり四季をわけの數類ふ設るふ無流行發句の風体をみるには書ふまんしものなし

同　今様發句集　八日菴万和輯　小本　全二冊
今時諸名家よりる吟ふ万和宗匠の秀句をくわへて採び集る四季發句集なり

大阪書林
心齋橋通北久太良町北へ入
河内屋儀助

Sanzo ens the Tower.